



成人向け
adult only

いつものように、フラッと旅に出ているアルルと相棒のカーバンクは、旅先で貰った珍しい(らしい)木の実に手を伸ばしていました。

「おいしいねえ、カーくん」

「ぐー！」

プチトマトのような、真っ赤でハリのある皮に歯を立てると、プチッとほじけて、果汁がじゅわっとひろがります。とってもじゅーいおいしい木の实でした。

酸味とあいまって、いちごみたいな味です。なんだかあと引く甘さで、ついつい次に手が伸びてしまいます。

木の实は二種類あって、クルミのような硬い実もありました。早速割ってみると、以外にも柔らかな、これもまたじゅーいな白い実が入っています。

ふにふにとやわらかく、齧ってみると意外と弾力のあるふにふにとした果肉が歯に心地よい実で、味は、まるで甘いミルクのようです。

たくさん貰った木の实を、偶然会ったルルーやウィッチ、ドラコなど女の子の友達に配って歩いた後でした。

二人とも食べる手がとまらず、ぺろりと平らげてしまいました。

なんだか、とってもおなかを満たされて疲れもあるのでしょうか。

とっても眠くなってしまった二人は眠るつもりもなかったのに、ベッドに沈んでぐっすり眠ってしまうのでした。

「……、……あ……れ……? ……」

ふわふわした意識の中、気がつく、
目覚めてベッドにいるはずが、森の奥を歩いていた。

(……ゆめ……?)

けれど、時折鋭い痛みが走りアルルは眉を歪めます。
手足には無数の傷がついていて、
どうやらイバラで傷付いたようです。

手足はもちろん、スカートもボロボロに破れていますし、
眠ってしまう前のパジャマ代わりに着ていた格好のままです。
外に出るには軽装だな、とアルルは思いました。

立ち止まって状況を確認したいのですが、
何故か脚が止まりません。

踏みしめる土の感触もしっかり返ってくるのに、
アルルの意識だけがふわふわとつかめません。

どうしてなのかわからないけれど、
とにかくなんだか行かなきゃ行けない気がします。

(……こ、みおぼえ、ある……)

そう、先日、旅先で見た森とそっくりでした。
イバラの少ない道を探して通るのに苦労した覚えがあります。

(知らない間に魔物とか…
他の魔導師の術中にはまっちゃった、のかな?)

色々な可能性を探しますが、
現状を脱する手立てがまるでみつかりません。

そうして、身体の制御は諦めて
ぐるぐると考えていた、その時です。

「・・・っわああああッ!!!???'」

突然、世界がぐるりと回転します。
樹に絡まっていた周囲のツタが、
アルルに巻き付いてきたのです。

トゲのついたツタが、アルルの肌を
更に傷付けながら、衣服を引き裂きます。

「やっ・・・いやあああああ!!!」

脚や指など、ツタは掴めそうなものに
どんどん巻きついていきます。

それだけでは飽き足りず、剥ぎ取った
下着の下にもツタが入り込み、
小さな穴を見つけた先端が、
そこへ無遠慮に侵入していきます。

「っは、はっ・・・!?
ちや・・・んなっ・・・!?」

アルルも予想していなかったのでしょうか。
尿意が膨れ上がり、
アルルは確信してしまいます。

尿道へ、無遠慮に暴れるルが
入り込んでしまったことを。

ぷちゅぷちゅと粘液と尿が零れ
その分ツタに何か注入されていくようで、
アルルはおなかが重くなるのを感じます

「っふ、ぐうううっ・・・っ!!」

逆さ吊りにされてしまったのと、
生理現象や羞恥心とで
アルルは全身を真っ赤にして堪えます。

魔法を唱える、という選択肢は
まるで浮かびませんでした。

何かをし終えたツタは、
アルルを開放します。

「っ、ふ・・・ふぐ・・・」

アルルの脚はガクガクです。
尿意を我慢しますが、
粘液が尿道から漏れ出します。

耐え難い生理現象の前では、
他のどんな事も気にしている
余裕はありません。

また別のツタが
アルルに襲い掛かります。
またあんな事をされてはたまらないと
必死に逃げるアルルの目の前に、
遺跡の入り口が現れました。
ツタの届かない場所まで逃げようと、
アルルは入り込みます。

ぐにっ。

「ひい!?!」

必死で奥へ奥へ走るアルルは、
触手が待ち受ける場所まで
誘導されてしまったのです。

予期しない感触に思わず
脚をとられたアルルは転んでしまい、
肉腫にとらわれてしまいました。

「このっ 離せっ!」

何かとってもぬるぬるしていて
異臭を放つ目の前のものに
アルルは顔を顰めますが

やっぱりぬるぬるしていて、
引き剥がそうとしても
手からぬるりと逃げて
掴めません。

必死に格闘していると、
ふと視界が暗くなります。



わあああああああああああ!!!!

奥からいつの間にかでてきたらしい
大きな口に、一瞬その姿を確認しただけで
たいした抵抗もできないまま、

頭からずるずると飲み込まれてしまいました。

アルルの残した叫び声は、誰にも聞こえません。

鼻に、口に、ねっとりした生臭い液体を
いっぱいしながら、
化け物に捕食されてしまいました。

ぴちゃ、ぴちゃ、とアルルは
甘いミルク味の何かを啜ります。

ほんのり甘くておいしくて、
いつまでも舐めていたい気がします。

それにしても、なんだか下のほうから
ゾクゾクするあの感覚でとろとろです。
無意識に動くままにっていて、
ふと思えます。

(ボク、食べられたんじゃ、なかったっけ)

「ふ、あ あっ…♡」
重い瞼を上げて確認します。

ずっとおしっこをしているような感覚なのは、
ずっと尿道を細い触手が
出入りしているからなのですが

それよりも。

目に入ったルに、アルルは釘付けになりました。

丁度とても太い触手が、
アルルのおしりに入ろうとしているところでした。

気絶している間に、大小沢山触手が既に入出入りしていた
…なんてことは、勿論アルルは知りません。
びくりにアルルは目を見開きます。

「あ、あ、そんなの、はいら—

ふあ… はああっ♡」

じゅぷぷっ…♡

すっかりとろとろにほぐされているおしりに、その太い触手が
何の抵抗も無く飲み込まれていきます。

「うう…うそ、うそだよお… こんなあ、ああっ…♡」

「いっ…!」

触手が、何か注射をします。

次いで、絞るかのようにぎゅーと強く押したり
引っ張ったりとねくりまわされ、
アルルは甘い声を上げます。

「なんれえ…?なんれきもちいのお…?」

注射された胸は、熱くなって
ぷっくり腫れてしまい、
臃らんだ気がします。

耳の穴を触手が出入りするので、
凄くちゅちゅします。

おへそや脇の下も撫でられて、
ねとねとの触手に頭を撫でられながら、
脚を掴まれていっげいに開いているので、
なにをされているかがよく見えてしまいます。

ポコポコの瘤がおしりの入り口…
出口でしょうか?
そこを擦られると、ゴリゴリして
すごく気持ちがいいです。

その上にある、女の子の大切な場所。
さっきまで撫でられていたのに、
何故か興味をなくしたように
それ以外の尿道と、
臃れた肉芽がしごかれています。
自分が知ってるよりも
ずっとぷっくりとしています。

一度に目の当たりにした
自分の体の変化に驚きながらも
知らなかった気持ちよさで、
他の事はどうでもよくなりました。

注射は代わる代わるされ続け、
どんどん胸が重く
大きくなっていきます。

ずん、ずん、と激しく突き上げられる
ままにしていると、
どんどん奥深くまで入り込んでいきます。

「はっ♡ ほう、うぐっ…!」

どんどんおなかが膨らんでいく気がします。

「はっ…はあ、ほう、うぐっ…!」
奥深くに進んで、戻って、と繰り返すので
どんどん擦り上げられる時間が長くなります。

先程まで甘かった声が、
どんどん苦しげに変わります。
おなかをみるみる膨らみ、
突き上げられると
おなかもぼこっ、と膨れます。
既に胃の下まで来ているように感じます。

今にも胃袋も通って
口から出てしまいそうです。
けれど、捕らえられているアルルには、
無様に腰を揺らす事しかできません。

「う、ふあ、きちゃ、う、きちゃうう…!」

内臓まで擦り上げられながら、
アルルはビクビクと背中を逸らします。

「～…ツツ♡」

アルルがどんな状態になろうと、
触手の動きは止まりません。



アルルが達したと同時に、
おなかからなんだか
あまいにおいがしてきます。

恐らく中で出されたものでしょう。
すると、だんだん
身体が軽くなっています。

ふと、アルルは気付きます。

もしかして、これを飲むと
元気になるのかもしれない。

アルルがちゅうと
吸い上げると、
触手はアルルの口に
白い液体を沢山
吐き出してくれました。

その間にも、触手はゆっくりとおなかを下りながら、
何かをアルルの中に吐き出します。

だから、触手が居なくなった後も、
なんだかおなかがいっぱいです。

それでは足りないよ
ばかりにアルルが口に含むと、
喉の奥まで入り込んで
どぶどぶとたくさん
吐き出して飲ませてくれます。

おなかいっぱいになるし
ふわふわするし
とってもきもちいいです。

なんだか元気が
出てきたアルルは
元気にお尻を動かします。

ここにいれば、
とてもしあわせな
気がしてきました。



触手が抜かれると、ゆるゆるになったアルルの穴から、触手が詰めた卵が勝手に出てきてしまいます。

出そうになる度に触手が押し戻します。だらしのない穴に蓋をしようと、ゆらゆらと瘤の触手が待ち構えています。

「そんな、そんなのだから、おなかぐるしいよ、ださせてよぉ・・・」

そう言いながら、アルルはおしりを高く上げてせがむように揺らします。

先程よりも大きな直径の瘤が、ひとつひとつ埋まっていきます。

先端からほどろりとした液体が噴出して、大きな瘤が蓋になり、零れないような仕組みです。

「あっ・・・あ、あ あっ・・・♡」

ぬるるる・・・っと全てがアルルの中に納まると、生えた尻尾を揺らして悦びました。



「あっ♡ あんっ♡ しゅごいっ♡でちやううっ♡」

ゼリーで蓋をされていた尿道から、
ツツに植えつけられた種が飛び出します。

触手の精液がないと育たない種を、
こうして運ばせているようでした。

いくつあるのかわかりませんが、
大きな瘤が膀胱を押し上げる度に
ポンポンと飛び出して生きます。

出が悪くなると、ぶちりと触手が千切れて
ミズのような触手が膀胱へ入り込み、
アルルのおなかのなかで押し出していきます。

「いっ♡いっちやうっ♡
またおしこの穴でいっちやうっ♡♡♡」

射精され続けるおなかはまだ膨れ上がって
卵を孵すために適した肉袋になっていきます。



「っえ、やあ、あんっ♡
まだ、ボク…っ イったばっか、りっ♡」

アルルが腰を振っている間は
大人しかった触手が、
突然ぐねぐねと動き出します。

アルルではできない、
力強い動きでアルルは
簡単に上り詰めてしまいます。

「はあ、あん、もう、あっ…♡」


アルルが満足しても、
動きは止まりません。
ごぼ、っとおしりから精液が零れます。
あの瘤で蓋にならないほどに
広がってしまったのでしょうか。

「もっ…あぐっ…
らめ、しんじょう…
ボクしんじょうよおお…!!」

肩で息をしながら、
無理矢理の絶頂を
何度も味わいながら。

おなかがボコボコと
動き出すのを感じました。

そして、意識を手放したのです。



アルルがふと気が付くと、最後の触手が我先に、とアルルの穴をいっぱいに広げながら中から出ようとしている所でした。

孵化したらしい触手は、びちびちとあたりでのた打ち回っています。

そして、目の前には、大きな花が咲こうとしていました。

これはなんだろう、と思いましたが、アルルが外から持ってきたあの種で育った植物のようです。

「ねえ、これ、ボクがあつた村に持っていきんでしょ？」

でも、ボク、キミたちがいないとダメみたい……

ねえ、もっと、ちょうだい」

膀胱の中が気に入ったらしい触手がまだおなかの中に入りますがアルルは触手にもっと、とお願いをしました。

「もっと、ボクの中に卵をちょうだい」

そして、アルルがあつた森に消えてから、少しの時間が過ぎました。





「やあ、久しぶり!」

探しにきたその人に、
アルルは変わらない笑顔を向けます。

「どうしたのさ、そんな顔して。
・・・探しに来た? ポクがふらっと
居なくなるなんて珍しくないじゃないか」

いつもの笑顔に、いつもの軽口。
けれど、びりびりに割かれた衣服に、
裸足に、と見れば、異様な格好でした。

それに、相棒のカーバンクルの事など
すっかり忘れてしまったような口ぶりです。

「ねえ、それより。
キミもこの実、食べたでしょ?おいしかった?
コレが沢山採れるところを知ってるんだ。

コレを食べに来たんでしょ?」

ちがう、とその人は言いますが、
アルルは知っています。

だから、来たのですから。

「ね、行こう。
いいところに連れて行ってあげるよ。」

アルルの下半身から、ゆらゆらと
揺れる異様なものが目に入ります。
聞きたいことは山ほどあります。

こくん。

その人は頷きます。

「じゃあ、行こうか」

え?という顔をするその人は、
アルルに手を引かれるまま、
森の奥へと消えていきます。

明るく話すアルルを見ていると、
自分が異常な気がしてきました。

そして、

seedbed which there is anywhere END

ページの都合でここであとがきてきなものになりますやっまい。

こんにちは、おゆきです。
何を思ったか、突発的にオールフルカラー本になりました。
おかげさまで、健全本は犠牲になりました。最近成人向けしか出してない気がする。

仕上がってみないと、文字が見やすいのか見にくいのかさっぱりわかりませんが。
見辛かったらすみません。次回以降直します。 次回あるのか。ないのか。

後半は差分で別 END というか、本来の END になります。
腹ボテとか母乳とか触手貫通とか色々。オールフルカラーだし、触手でゲロゲロにやろう！
と思ったのですが、まあ、なめてました。すみません。落ちないか心配するレベルで大変でした。
もっとグロい触手とかやりたかったはずなんですが。ですが。ぬるくてもうね。ね。
表紙のアルル可愛くないっていかアレだよコレだよ色々思うものになってしまったり、
そもそも身体がうまくかけてないとか。あーばーば
肌がてゅるんてゅるんで白濁液がうまくいってれば、と思います。
印刷されて塗りの札さに凹むので、九割はそうだと思いますごめんなさいすみません。
モニタ変えたらマシになるかしら。

前半は、もうちょっと終わってない人向けにしよう、と差分を付けたものだったりします。
後半は、まあ趣味が終わってる奇人変人向け。なのか。たぶん。
アブノーマルの境界線がいまいちわからないけど、まあノーマルでは、多分ない。きっと。
妊娠ネタとか、自分も昔は嫌悪してた側なのですがね。なんで描いてんだらうか。

文章のですます調は、絵本みたいな語り口で、淡々とエグい事を語られた方が好きだからです。
男性には合わないかもしれませんね。すみません。そして別にエグくもない。
アルル自身を感じていることはあまり書かない方がええなーと思ったからなのですが、
DL 版とか出すときには、もう少し文章を増やして、その辺も書けたらいいのかなーなどとは。
(新規イラストはないですが、文章は増えると思います。
DL 版→文字なしを見たい・文章見たい人向け。そして別に発売日は未定。)

あと、フォントの「♡」で遊んでみたかったので、アホなセリフなどは楽しかったですが
内容もなんもかんも、アホいのよか崩壊しているものが嫌いな人はほんとにすみません。

アルルを探しに来た「誰か」は好きなCPにでもしたらいいじゃない。と思う。
まあ、そんなこんなで。また星屑輪舞シリーズでもお会いできれば幸いです。

それでは、また。

Mother of God pro END



「いっ…!」

触手が、何か注射をします。

次いで、ぎゅーと絞られると、
びゅるるるっと白い液体が勢よく噴出し
アルルは甘い声を上げます。

「なんれえ…? なんれきもちいのお…?」
「なんででてりゅのお…?」

注射された胸は、熱くぷっくり腫れて、
絞られると牛さんのようにびゅーびゅーと
母乳が飛び散ります。

耳の穴を触手が出入りするので、
凄くくちゅくちゅします。

おへそや脇の下も撫でられて、
ねとねとの触手に頭を撫でられながら、
脚を掴まれていっぱい開いているので、
なにをされているかがよく見えてしまいます。

ポコポコの瘤がおしりの入り口…
出口でしょうか?
そこを擦られると、ゴリゴリして
すごく気持ちがいいです。

その上にある、女の子の大切な場所。

太い触手が、無遠慮にそこを貫きました。
はじめてなのに、ずぶずぶと乱暴に
扱われても、痛みより気持ちがいいです。
腫れた肉芽がしごかれています。
触手が入っていないのは、
鼻の穴くらいです。

一方的に与えられる快樂の波に、
アルルの意識はどんどん溺れて
どこかにいってしまいました。

「っ・・・!!!」
誤って鼻の穴を
触手が飛び出します。

ずん、ずん、と激しく突き上げられる
ままにしていたので、奥深くまで入り込んで
遂に口まで貫通してしまったのです。

「おっ♡ おごお・・・♡ げっ・・・!!」

アルルの最初から最後まで、触手の
長さの分以上に擦り上げられます。

器官まで塞がれて呼吸がままならないのに、
アルルは甘い声をあげていました。

ぼっこりと膨れたおなかも、動きに合わせて
ぼこぼこ形を変えます。

ずりゅっ ずりゅっ ずりゅっ・・・

穴を押し広げるように身体の中をうねると
ゆっくりと触手が下り始めました。

体内への産卵が始まったのです。
子宮へも、硬い道をこじあげ、
卵が産み付けられました。

鋭い痛みと、凄まじい快楽に
アルルはビクビクと背中を逸らします。

「～・・・ツッ♡ ああああぁっ♡」

アルルがどんな状態になろうと、
触手の動きは止まりません。



耳をぐちゅぐちゅされて、
まるで頭の中をぐちゃぐちゃに
されているような気分です。

先端をくすぐられるだけで
アルルの母乳が噴出します。

「っまあ、ああっ♡
でてりゅっ♡ いっぱいでりゅっ♡」

触手をゴシゴシすると、
アルルよりも勢いよくびゅるびゅる
甘いミルクが出てきます。

おいしいミルクを沢山飲みたくて、
アルルは喉の奥まで啜えて
じゅぱじゅぱとしゃぶります。

その間にも、触手はゆっくりとおなかを下りながら、
食道や胃の中いっぱい卵を詰め込みます。
いくつ出されるのかわかりませんが、
おなかがポコポコと変形して、
おしりから零れそうになるまで詰め込まれます。

ここに来るまでにあった、
恐怖感や不安な気持ち。

どうしてそれがあったのか、
今はよく思い出せません。

おなかも気持ちも満たされた
アルルは、なんだか
すごくあわせな気分です。

もっとしあわせになる為に、
元気にお尻を動かします。

3つの肉穴が、いえ、
口も耳も、全てが一度に
ゴリゴリと擦れます。





触手が抜かれるとガバガバの穴から、卵が勝手に出てきてしまいます。

出そうになる度に触手が押し戻してくれてそれもすごく気持ちいいです。だらしのない穴に、瘤が連なった触手が蓋をするように入っていきます。

「すごいよお、はいっちゃうっ♡
おっきいのぜんぶはいっちゃううう・・・♡」

胃に詰まった卵を口から吐きそうなくらい押し上げられますが、アルルは自らおしりを高く上げながら押し付けてきます。

瘤は蓋になり、これから詰められる精液が漏れないようにする為の形状です。

尿道にも同じような触手が入っていて既に射精されてパンパンです。子宮は種と共に射精が完了しています。

「あっ・・・あ、あ あっ・・・♡」

びゅる、と射精がはじまり、おなかがじわじわあたたかくなります。

ところが、膣から触手が引き抜かれてしまいました。

代わりに、オトコノヒトの形をした触手が入って
アルルにもルが生えてしまいました。

アルルと神経が繋がれているらしく、
なでなでされると膀胱に溜まっていた
精液を種を射精してしまいます。

「あっ♡ あんっ♡ しゅごいっ♡ でちゃうっ♡♡」

尿道を細い触手がグリグリと入り込み、
種を塞ぎ止められてしまいます。

「らめえ、ほじっちらめだよおおっ♡」

触手が引き抜かれると種が勢いよく飛んで
辺りにばら撒かれます。

「いっ♡ イっちゃうっ♡
ぜんぶでイっちゃうっ♡♡♡」

ぐりゅぐりゅとおしりを振ってかき回しながら、
アルルは一際大きくビクビクと震えます。



ちゅうちゅと吸われるようにして、
アルルの母乳が搾乳されていきます。

気絶したりしなから、
少しの時間が経ちました。
何度か触手が解り、
何度か卵を植えられました。

母乳はこれから解る触手が飲むのです。
片方の垂れ流しの母乳に
まだ幼い触手が群がっています。

ふと気が付くと、目の前では
たくさんの花が咲こうとしていました。
アルルの栄養たっぷりの精液で
すくすくと成長した花たちでした。
これが咲いて、実をつけたら、アルルは
これを届けに行かなければなりません。

「ねえ、ボクまだここに居たいよぉ・・・
っあ、はぁ、っ♡また、で たあ、あっ♡」

触手に射精されると、隙間をぬって
精液がおしりから噴射します。
大きなおなかも、すっかり馴染んで
本当に自分の子供のようにです。

けれどアルルの本当の子は、
これから生まれます。
子宮に植えられた種でアルルは触手との
子供を孕んでいました。

アルルは、とっでもしあわせなさがしました。





「っえ、やあ、あんっ♡
まだ、ボク……っ イったばっか、りっ♡」

おなかの卵が孵る時がきました。
ボコボコとおなかの中が動いています。

力強い動きでアルルの身体が浮き上がる
ほどに突き上げられます。

また簡単に気絶させられてしまうでしょう。

「おごっ……♡ おおおおおっ♡」

胃で孵った触手が、口から溢れます。
突き上げる触手を分けて、
おしりからも、新たな触手が溢れます。

アルルの身体は、いまや内側の
全てまで性感帯でした。
達し続けけるアルルの小さな身体は、
おもちゃのように跳ね上がり続けます。

あそこからは、びゅるびゅると最後の
精液を噴射しました。
次に目覚めるときには、花は落ちて
実がなっていることでしょう。

ごぼ、っとおしりから精液が
どろどろと大量に零れます。
既に意識を手放してしまったアルルは、
それでも突き上げられて反応するまに
腰が浮き上がっていました。

アルルのおなかは、おおきなままです。



「やあ、久しぶり!」

探しにきたその人に、
アルルは変わらない笑顔を向けます。

「どうしたのさ、そんな顔して。
・・・探しに来た? ポクがふらっと
居なくなるなんて珍しくないじゃないか」

いつもの笑顔に、いつもの軽口。
けれど、ギリギリに割かれた衣服に、
裸足に、・・・そのおおきなおなか。

チャームポイントだった髪型も、
一つに緩く束ねて下ろしていました。

「..ああ、ちょっとね。ふふ。
だって、ほら。ポクももうオトナだし。」

昔の自分とは違うんだよ、と言いつげに
アルルは大事そうにおなかを撫でます。

きっとその人は、アルルの身に起きている
ことを重々知っていました。

「え? なんで?
帰らないよ、ポク。だって」

アルルの下半身から、ゆらゆらと
揺れる異様なものが目に入ります。

それを見た、その人の反応など気にもせず
アルルは言います。

「みんなだってここにいるし、
帰る必要なんてどこにあるの?」

と、首を傾げました。

その人は、苦笑げに呻きます。

アルルは、また怒らせたかなと思いました。
自分の突拍子も無いらしい言動や行動に、
周りが振り回されていると感じている事も
アルルは知っていましたから。
勿論そんな自分を好いてくれている、とも。

「なんなら、キミもここに――・・・」

アルルの身体が、崩れました。



「っあ、う……」

よろけたアルルが呟きます。

「う、まれ、ちゃう、っ……!」

生まれたての小鹿のようにぷるぷると震えるアルルの股の間から、ずるりと何かが出てきています。

「っ……みてて、ボク、おかあさんになるの、みてて……っ……!」

そんなアルルを見下ろしていたその人が言います。手伝う、と。

そして。

おもむろにそれを驚掴み、引っ張ろうとしました。

「っあ、らめっそんなの、いきなり、なの、ボク、イチちゃ、うう……!」

そして、その人は。
アルルが愛おしそうにみるるを、そのまま

奥付

誌名：パラサイト
印刷所：トム印刷

発行元：月華の猫
発行日：2011.12.29

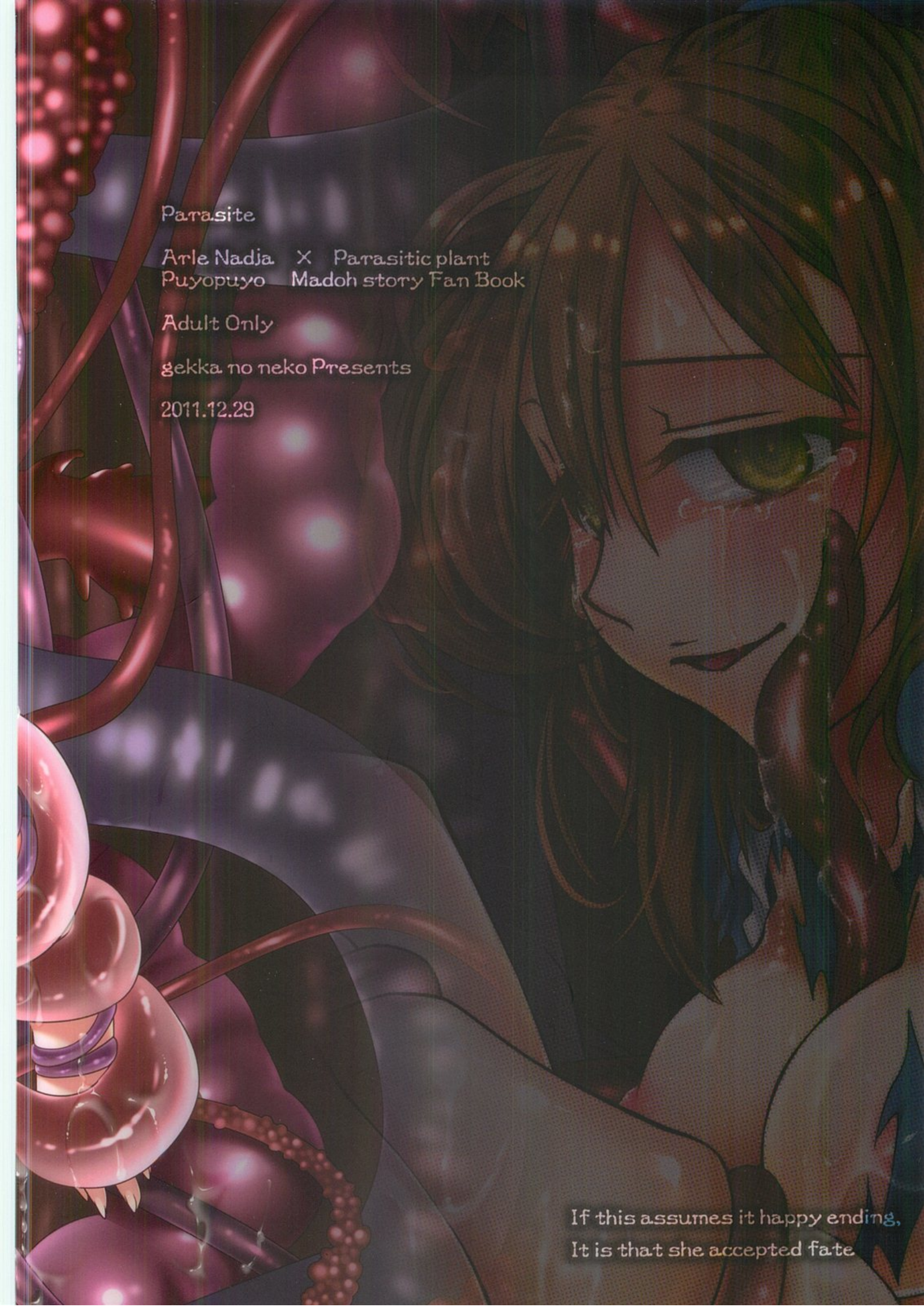
発行者：おゆき
Special Thanks：いつき (SweetSprite)

連絡先

<http://negurekuto.sakura.ne.jp/>
oyuki_g@hotmail.co.jp

※無断転載・複写・画像取込・違法アップロード禁止

オークションによる転売はお控え下さい。
扱っている作品の原作者・版権元・関連団体とは一切関係ありません。



Parasite

Arle Nadja X Parasitic plant
Puyopuyo Madoh story Fan Book

Adult Only

gekka no neko Presents

2011.12.29

If this assumes it happy ending,
It is that she accepted fate.